

神戸川流域における暗文土師器

—矢野遺跡の事例を中心に—

高橋 周

1. はじめに

出雲弥生の森博物館では、2011年3月26日から5月16日にかけて、2011年春季企画展として「東西南北二五〇〇年の交流—矢野遺跡の調査から—」と題する展覧会を開催した。矢野遺跡は出雲平野のほぼ中央、出雲市矢野町に広がる遺跡である。1953年以来、9次にわたる発掘調査が行われた。2010年には期間8年間に及ぶ第9次調査の報告書(坂本・原2010)が刊行され、本企画展は矢野遺跡の調査の総括的な位置付けをもつものであった。紙幅の都合上、矢野遺跡の詳細は既刊の報告書を参照されたい。本稿に係る古代の遺構については、複数の掘立柱建物・土坑・井戸が確認され、「社」「社司」などの墨書土器が出土することから、付近に『出雲国風土記』所載の「八野社」の存在が推定される。また、多数の転用硯、石製巡方などが出土し、公的施設の存在も窺わせる。

本企画展の開催に際して、報告書非掲載資料を含む出土資料の再検討を行った。その中で、第9次調査の資料に7～8世紀に属する赤色塗彩されない暗文をもつ土師器(以下、「暗文土師器」と呼ぶ)が多数含まれていることを確認した。これらは、いわゆる「畿内産(系)土師器」と称されるものである。本稿においては、矢野遺跡(第9次調査)で確認した「暗文土師器」について検討するとともに、神戸川流域における「暗文土師器」の事例と合わせて考察したい。

2. 矢野遺跡出土の暗文土師器について

① A群土器<杯A・杯C・皿B>

ここでA群とするのは、精緻な胎土で、その色調が橙色(Hue 5YR6/6, 7.5YR6/6)あるいは明赤褐色(5YR5/6)などを呈する「暗文土



図1 矢野遺跡調査位置と第9次調査の地区名

師器」である。これらは、宮都周辺で出土する「暗文土師器」とその色調や調整が類似し、同地域から搬入された「畿内産土師器」に相当するとみられる一群である。個体数は少なくとも20点を数え、島根県内で同様の土師器が出土する場合、一つの遺跡につき1～2点が多く、異例とも言える数である。

A群の土師器が出土した調査区は、現在の八野神社の東南に位置するB区西半部に集中する。後述するB・C群の土師器も同様の分布を示しており、B区にこれらの土師器に関連する施設の存在が想定される。矢野遺跡における「暗文土師器」のほとんどが包含層からの出土で、遺構に係る具体的な検討は困難である¹。ただし、B区には古代以降と推定される建物跡に囲まれた空閑地が認められ、暗文土師器の多くがその周辺で見つかることは注目される。

図2に示したのが、A群の土師器である²。このうち、7～12が杯Aである。口縁端部を肥厚させ玉縁状となるもの(8・11・12)と内傾するもの(7・9・10)がある。調整は底部外面を

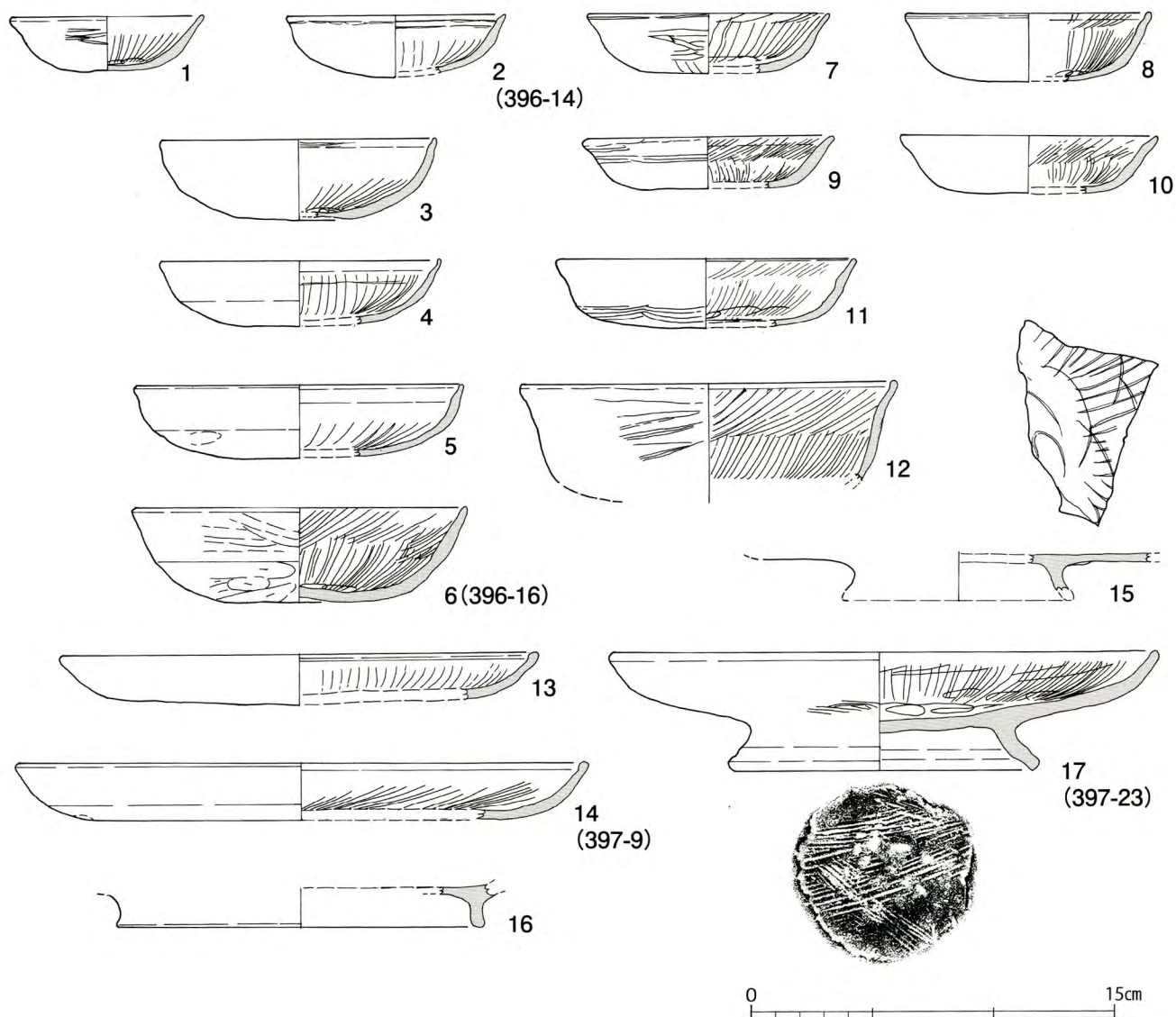


図2 A群土器 (1:3 カッコ内は報告挿図番号)

削って口縁部外面を磨くb1手法(7・8), 底部外面を不調整で残し口縁部外面を磨くa1手法(9~12)がみられる。内面の暗文は7~12ともに放射二段暗文をもち, 7・8・11には螺旋暗文も認められる。また, 1~6が杯Cである。口縁端部は内傾するもの(1・2)と内側へ軽く巻き込むもの(3~6)がある。調整は口径が11.5cm以下の1~4がa1手法もしくは底部外面を不調整でミガキが行われないa0手法で, 口径が13cmを測る5・6はb1手法である。内面の暗文は1~5は放射一段暗文をもち, 6は放射二段暗文と螺旋暗文が認められる。また, 13・14は皿Aである。いずれも口縁端部は肥厚させ玉縁状にする。調整はともにa1手法で放射一段暗文をもつ。13・14の出土地点は異なるが, 色調がともに明赤褐色で胎土も

よく似る。また, 15~17は皿Bもしくは杯Bである。15は高台の破片で, 内面に放射暗文, 連弧暗文, 螺旋暗文が認められる。16も高台の破片で, 小片のため暗文は認められないが, 色調が橙色~明赤褐色を呈し精緻な胎土であることからA群に含めた。15・16は皿B・杯Bの一部であろう。17は皿Bである。口縁端部をやや肥厚させる。調整はb1手法で, 底部外面には高台貼付時の際を目安としてつけられたハケ目が残る³。高台は外側にふんばる形状を呈し, 飛鳥Ⅲ~Ⅳ期に見られるものである。内面には放射二段暗文に螺旋暗文を加える。色調は橙色(2.5YR6/8)。なお, 図4は鹿蔵山遺跡(出雲市大社町杵築南)出土の土師器杯Aである。既報告資料(石原ほか2005)であるが, 企画展で「畿内産土師器」の一例として展示, 再実測

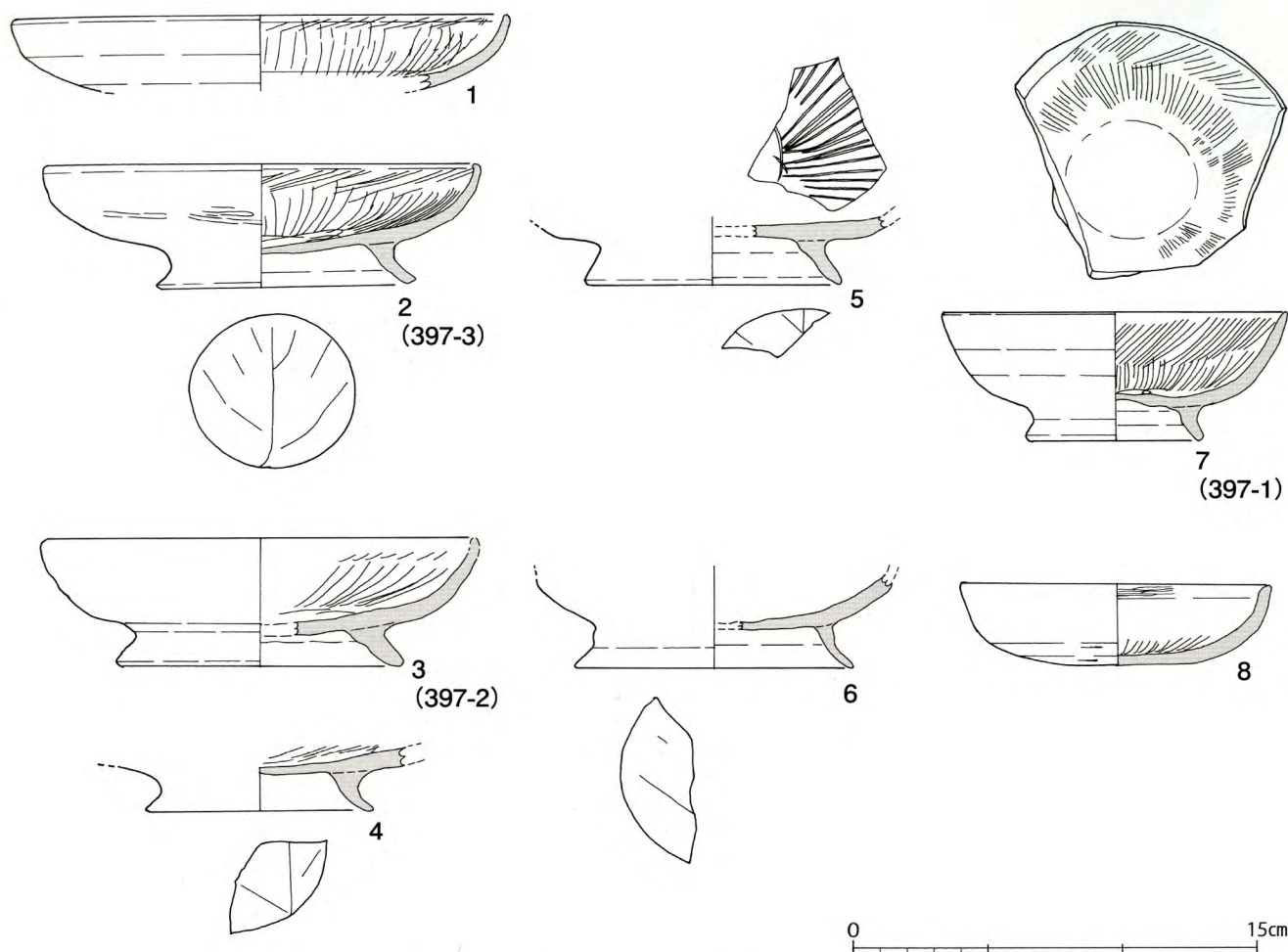


図3 B群土器 (1:3 カッコ内は報告挿図番号)

を行った。口縁端部をやや肥厚させ、調整はb1手法である。内面の暗文は、放射二段暗文と螺旋暗文が認められる。底部外面に黒斑をもつ。

A群土器の年代は、その器形から概ね飛鳥IV～平城I期(680～710年代)におさまるものと考えられる。

② B群土器<杯B・杯C>

ここでB群とするのは、精緻な胎土に長石・石英及び赤色粒子などが少し含まれ、その色調



図4 鹿蔵山遺跡出土の畿内産土師器 (1:3)

は浅黄橙色 (Hue7.5YR8/4-6)、にぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈する「暗文土師器」である。B群の土師器出土の調査区は、A群と同様に現在の八野神社東南のB区西半部に集中する。

図3に示したのが、B群の土師器である。口縁端部を肥厚させ玉縁状にするもの(1・2)と丸くおさめるもの(7)がある。1～7はいずれも杯Bとみられるが、その高台は内面に稜をもち外側にふんばる特徴をもつ。調整は口縁部を中心にミガキが施される。2～6の高台内には葉脈の痕跡が残り、杯部の成形について木ノ葉成形の手法がとられた可能性が高い⁴。高台は貼り付けであるが、その中心軸は杯部と一致せず、回転台成形ではないことを窺わせる。内面の暗文は、1～3・7に放射二段暗文が認められ、2・3・7には螺旋暗文がある。4・

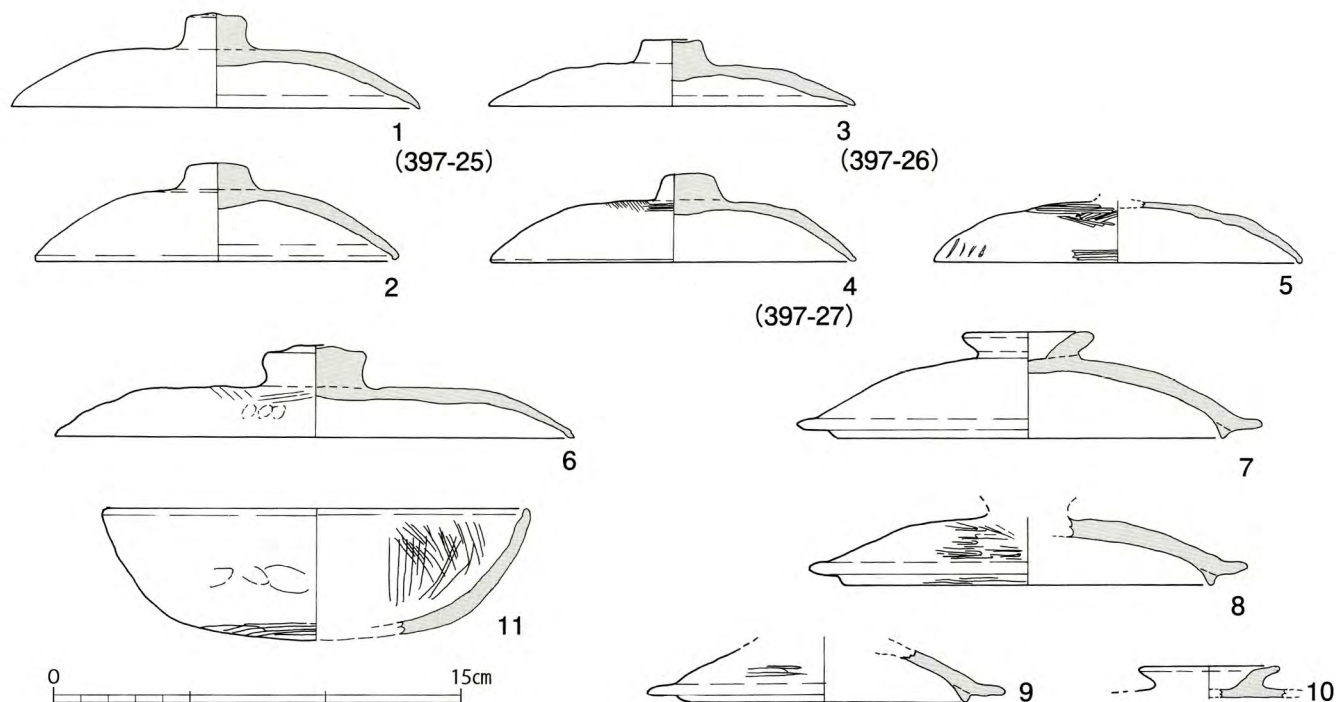


図5 C群土器 (1:3 カッコ内は報告挿図番号)

5は高台のみであるが放射暗文がつき、5には螺旋暗文がある。6は風化が激しく暗文は確認できない。8は胎土の特徴からB群とした。外面の調整は風化のため不明であるが、底部は横方向のケズリ。口縁部内側にミガキを施し、内部に放射状暗文がつく。

B群の土師器にはA群とともに同グリッド・同層位で出土したものがあり、何らかの関係が想定される。その形状から「畿内産土師器」とはできないが、特に高台部の外側にふんばる形は、飛鳥Ⅳ期に相当する奈良県橿原市・桜前上山遺跡第2次第5トレンチ包含層の事例(林部1985)にあるように当該期の特徴の一つである。近県の事例としては、広島県海田町・畝観音免1号墳出土の杯Bがある(安間1992)⁵。B群の特徴として、口縁部が玉縁状であることや木の葉成形が認められることを考えると、B群は畿内の技法的影響下にあると言える。その時期は、A群と近い時期に推定することができよう。

③ C群土器<蓋・杯C>

C群は蓋を中心とする土器群である。胎土は精緻で1mm以下の砂粒をわずかに含み、一部に赤色粒子が見られる。その色調は、図5-1

～6・11が淡橙色(Hue 5 YR8/4)、7～10が橙色(5 YR7/4)を呈する。蓋の形状は口縁部が細まるもの(1～6)と「かえり」をもつもの(7～9)に分かれ、それぞれに対応する頂部がある。2～5・8はいずれも口径13.4cmで、一定の規格性が窺える。1～6はユビオサエによる成形痕が顕著で、口縁部を成形した後につまみを付け、ナデによる調整をする。4～6にはつまみ周辺を中心に直交するミガキが見られる。内面はナデを施し、暗文は確認できない。7～9は外面頂部から口縁部の「かえり」の内側にかけて、ミガキが施される。内面はナデ。7は、つまみと口縁部は別破片であったが、色調・胎土・調整が似ることから、同一個体と捉えた。「かえり」をもつ土師器蓋は島根県内に類例を見ることはできない。また、11は胎土・色調がC群の蓋とよく似る。底部を削り、体部はユビオサエもしくはナデによる調整。内面には粗雑な放射二段暗文がつく。

C群土器についても、手づくねによる成形とともに蓋のミガキ調整など、畿内の技法的影響を見ることができる。また、「かえり」をもつ土師器蓋は、つまみの形状などは朝鮮半島の影響を受けた可能性がある。C群土器もA・B群と同様な出土状況を示しており、飛鳥Ⅳ～平城Ⅰ

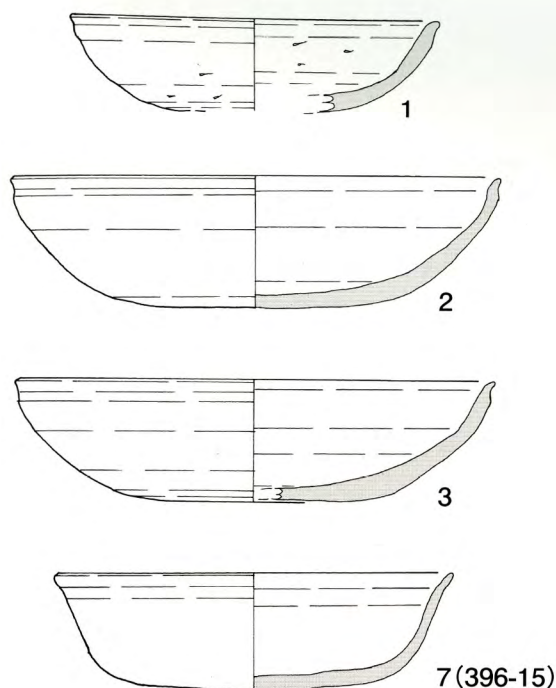


図6 D群土器 (1:3 カッコ内は報告挿図番号)

期に相当する時期が考えられる。

④ D群土器<杯A・杯B・杯C>

D群土器とするのは、1～3mm程度の長石・石英を多く含み、浅黄橙色(7.5YR8/4)を中心とした色調をもつ土器群である。長石などを多く含むことから、それらの剥落が顕著である。また、赤色粒子も少し含む。D群の土師器に暗文は認められないが、その出土地点はA～C群と同様にB区で、グリッド・層位も同じである。したがって、本稿では「暗文土師器」に関連する一群としてD群を位置づける。

図6に示したのがD群の土師器である。特に1～5は形状の特徴が類似しており、同一の手法によると考えられる。1は13.4cmと小ぶりで、2～4は17.8cmと二分することができる。その形状は、口縁部を内傾させ、外面に浅い凹線がめぐる。調整は底部周辺がケズリ後ナデ、そのほかはナデによる。外面と内面の一部にはミガキが見られる。ケズリは横方向に手持ちによるもの。4・5は高台のつくもので、高台貼り付け後にナデを施す。6は風化が激しく、外面の調整は不明であるが、口縁部外面にナデによる浅い凹線がめぐる。7も風化のため外面の調整は不明であるが、口縁部内側の一部にミ

ガキがみられる。

D群土器もA～C群と同様のグリッド・層位で出土しており、同時期の所産である可能性が高い。後述するが、鹿蔵山遺跡や古志本郷遺跡でも類似の土器が出土している。

3. 矢野遺跡と神戸川流域の遺跡の暗文土師器

前節まで矢野遺跡出土の「暗文土師器」を分類したが、このような赤色塗彩されない「暗文土師器」の事例は、神戸川流域の遺跡においても確認される。本節では、矢野遺跡での分類に関し、神戸川流域の遺跡出土の「暗文土師器」について触れたい。

A群土器は、緻密で橙色あるいは明赤褐色の胎土をもつ、いわゆる「畿内産土師器」に相当する。神戸川流域の遺跡からの出土例については、奈良文化財研究所の集成がある(奈文研2005)。それによると、上流域では板屋Ⅲ遺跡(破片)・森遺跡(杯A)、下流域では上塩冶横穴墓群14支群(杯C)・古志本郷遺跡E区(杯A?)の事例がある⁶。その集成にはないが、古志本郷遺跡K区SE01の杯C(守岡ほか2003<51図-11>)も同例に入るとみられる⁷。神戸川流

域ではないが、鹿蔵山遺跡でも杯Aが確認される(図4)。神戸川流域の「畿内産土師器」は官衙・集落遺跡に多く、島根県内では墳墓からの出土が多いことに比して特徴的である。遺跡あたりの出土点数でみると、神戸川流域を含め県内の遺跡は1～2点が大半で、矢野遺跡では20点と多い。

また、B～D群に相当する「暗文土師器」も神戸川流域の遺跡において認められる。特にB群の特徴である底部外面に木葉痕が認められる事例が複数の遺跡で確認される。その一つが、三田谷I遺跡SD06出土の杯A(熱田ほか2000<64図-12>)である。暗文は認められないが、底部外面に木葉痕が確認される。胎土は浅黄橙色で、長石・石英及び赤色粒子を少し含み、底部には剥落がみられる。矢野遺跡のB群土器に近い特徴をもつ。また、上流域の神原II遺跡I区包含層出土の杯A(鳥谷ほか2000<26図-8>)の底部外面にも明瞭な木葉痕がある。報文は内面の暗文を放射二段として図示するが、実見したところ、見込み面には螺旋状暗文も確認される。色調は橙色あるいは明赤褐色で、外面には黒斑があり、「畿内産土師器」に類する可能性もある。また、神原I遺跡A区出土の杯B(鳥谷ほか2000<31図-6>)の高台内にも木葉痕とみられる凹凸が確認される。色調は橙色を呈し、報文は赤色塗彩とするが、胎土の発色によるものとみられる。胎土の色調・焼成ともに、矢野遺跡のB群土器と特に類似するものとして注目される。さらに、門遺跡SI08出土の土師器(内田ほか1996<19図-25>)にも木葉痕が認められる。

矢野遺跡をはじめ神戸川流域の複数の遺跡において、土師器底面の木葉痕が確認されることは注目される。管見の限りにおいて、木ノ葉成形技法の展開を専論した論考はなく、全国的な視点からの検討は十分に行われていないのが現状である。神戸川流域の木葉痕をもつ土師器は

色調・胎土から在地産もしくは畿内周縁部での生産の可能性が高く、複数遺跡での分布確認は在地における木ノ葉成形技法の展開の可能性を高めるものである。本稿では神戸川流域の事例のみを検討したが、斐伊川流域や出雲東部における事例も精査し、出雲国における木ノ葉成形技法の展開を考えたい。この点については今後の課題である。

また、矢野遺跡B群土器と同様に、浅黄橙色やにぶい橙色を呈する暗文土師器は、古志本郷遺跡・三田谷I遺跡などにおいても確認される。紙幅の都合上、その個別事例の検討は提示できないが、矢野遺跡における暗文土師器の分類は神戸川流域に展開できる可能性が高い。

また、図5-1～5のD群土器と類似するのが、古志本郷遺跡F区包含層出土の土師器(松尾ほか2003<11図-21>)である。内面に放射一段暗文がみられ、報文では外面の調整を回転ヘラケズリとするが、実見のところ、手持ちによるケズリにミガキを施したものと確認した。その形状は矢野遺跡の事例と少し異なるが、口縁部に浅い凹線がめぐる点や底部をヘラ切り後に高台を付けナデによる調整をする点など、類似の事例としてあげておく。また、鹿蔵山遺跡包含層出土の土師器(石原ほか2005<48図-18>)も同例と考えられる。

以上のように、神戸川流域の遺跡において、A群の「畿内産土師器」をはじめ、B群における木葉痕や同様の色調・胎土をもつ土師器、D群と同様の調整を施す土師器など、矢野遺跡にみえる土師器と共通した要素が確認されることは注目される。その傾向の起因・背景については、隣接の諸地域の様相をふまえた上で、今後検討すべき課題である。

4. おわりに

最後に、矢野遺跡の「暗文土師器」の年代観

についてまとめておきたい。矢野遺跡の「暗文土師器」はほとんどが包含層からの出土であり、厳密な意味での一括性のあるものとはできない。ただし、出土の範囲や層位には一定のまとまりが認められ、同時期の所産のものである可能性が高い。それらの年代観を推定するにあたり、参考となるのはA群土器で、その器形から概ね飛鳥Ⅳ～平城Ⅰ期（680～710年代）におさまるものと考えられる。したがって、B～D群土器についても、その年代に准じるとみられる。

B～D群土器の年代観をこのように捉えることができるならば、注目されるのは岡田編年・出雲Ⅱ期の須恵器（岡田・土器検討グループ2010、以下、型式分類もこれによる）との関係である。例えば、C群土器の輪状つまみでかえりをもつ蓋（図4-7～9）は出雲Ⅱ期・蓋Ⅰ類に相当する。同様に、B群土器の杯B（図3-1～6）は、木葉痕などの成形・調整においては畿内の技法的影響下にあるが、口縁部が直立気味となることやハ字状の高台など、その形状は出雲Ⅱ期・杯ⅡA類に近い。また、D群土器の杯C（図6-1～3）は、口縁部外面に浅い凹線をもつなど、その形状は出雲Ⅱ期・杯Ⅰ類に似る。

ただし、C群土器の蓋のつまみは厚く外傾しており、輪状つまみの古い形態とされる松江市・西宗寺古墳出土の杯蓋あるいはその形状の類似が指摘される韓国・慶州皇吾洞118-6遺跡や皇南洞376遺跡出土土器に近い（重見2008・川原2010）。また、D群土器についても、その形状は藤原京・大官大寺SK121下層出土土器のうち、ロクロ製土師器（西口・玉田2001〈図58-80・81〉）に近く⁸、単純に当該期の在地系須恵器の模倣とも言い切れない。

このように、矢野遺跡の「暗文土師器」の一部には出雲Ⅱ期の須恵器の形状に似るものがある一方で、木葉痕や細かなミガキなどの成形・

調整については、出雲の同時期の土師器には見られない特徴をもつ。さらに、その形状には朝鮮半島の土器に近い特徴をもつものもあり、川原和人による出雲型須恵器と新羅土器の類似性の指摘（川原2010）とも関係して興味深い。「律令的土器様式」への変化が660年代の百濟遺民からの文化的影響にみる指摘（西1986）があるように、その影響を反映した可能性もある。それが、直接的なものか、間接的なものかは、木葉痕との関係もふまえて検討する必要がある。また、岡田編年（岡田・土器検討グループ2010）では出雲Ⅱ期を飛鳥Ⅲ期と対応させ、7世紀後葉に比定する。しかし、矢野遺跡では飛鳥Ⅳ～平城Ⅰ期の「畿内産土師器」が出雲Ⅱ期の須恵器と同層位から出土しており、矢野遺跡の「暗文土師器」の年代については同層位出土の須恵器の検討も含めて改めて考えなければならない。

以上、煩瑣な考察となった。矢野遺跡出土の「暗文土師器」については検討すべき多くの点を残すが、7～8世紀における出雲の土師器の型式成立を考える上で、重要な資料となることには違いない。今後は既に述べた課題を含め、赤彩暗文土師器との関係など、従来総体的に考察されることが少なかった出雲国における律令期の土師器について、考察を進めていきたい。

〔補記〕 本稿をまとめるにあたり、奈良文化財研究所・金田明大氏よりご教示を賜った。また、資料調査に際して、島根県埋蔵文化財調査センター・勝部智明氏のご協力を得た。記して、感謝申し上げる次第である。

註

¹ 包含層からの出土が多い様相は、赤彩土師器も同様である。出雲平野の他の遺跡でも、赤彩土師器は包含層からの出土が多く、その用途をめぐる検討も必要であろう。

² 図2-2・6・14・17をいずれも赤彩とするが、胎土の発色によるものである。

³ 金田明大氏のご教示による。

⁴ 線刻による「畿内産土師器」の模倣の可能性も考えたが、胎土の粒子・砂粒の動きを観察すると、線刻ではなく押圧による痕跡であることが分かる。

⁵ 同資料は海田ふるさと館に展示される。実見したところ、B群と色調が近く、芸備地方の土師器も含

めた検討の必要があるかもしれない。

⁶ 本稿においては、便宜的に神戸川が出雲平野に出る出雲市朝山町周辺を境として、上流・下流に分ける。

⁷ 報文中の観察表には、「赤色顔料付着」との記載されるが、実見したところ認められなかった。また、調整も「回転ナデ」とするが、口縁部は「ナデ」、底部は未調整である。この事例のように、胎土による発色を「赤色塗彩」などとする事例が少なからず存在すると考える。

⁸ 口縁部を内傾させ平坦面をつくる点においては、韓国・慶州皇吾洞118-6遺跡の2号基壇建物跡出土の土器にみられる特徴（川原2010）に近い。

参考文献

熱田貴保ほか 2000『三田谷 I 遺跡 Vol.2』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4，建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会。

安間拓巳 1992「広島県出土の暗文土師器」『芸備』30，41～60頁。

石原 聡ほか 2005『鹿蔵山遺跡』大社町立大社小学校改築事業に伴う発掘調査報告書，大社町教育委員会。

内田律雄ほか 1996『門遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書3，島根県教育委員会。

岡田裕之・土器検討グループ2010「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター，13～43頁。

川原和人 2010「出雲地方における律令時代の須恵器の特色とその背景」『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター，103～122頁。

坂本豊治・原 俊二 2010『矢野遺跡』新内藤川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書，島根県出雲県土整備事務所・出雲市教育委員会。

重見 泰 2004「7～8世紀を中心とする新羅土器の形式分類―「新羅王京様式」構築に向けての基礎研究―」『文化財学報』第22集，奈良大学文学部文化財学科，27～56頁。

重見 泰 2008「新羅土器形式分類の検討―形式の出現とその背景―」『考古学論攷』第31冊，奈良県立橿原考古学研究所，49～68頁。

鳥谷芳雄ほか 2000『神原 I 遺跡・神原 II 遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書8，建設省中国地方建設局・島根県教育委員会。

奈良文化財研究所 2005『畿内産暗文土師器関連資料 I - 西日本編 -』。

西 弘海 1986『土器様式の成立とその背景』。

西口壽生・玉田芳英 2001「大官大寺下層土坑の出土土器」『奈良文化財研究所紀要2001』独立行政法人奈良文化財研究所，26～29頁。

林部 均 1985「桧前・上山遺跡」『奈良県遺跡調査概報（第2分冊）1984年度』奈良県立橿原考古学研究所，419～432頁。

松尾充晶ほか 2003『古志本郷遺跡 V 出雲国神門郡家関連遺跡の調査』斐川放水路建設予定地内発掘調査報告書16，国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会。

守岡利栄ほか 2003『古志本郷遺跡 VI K 区の調査』斐川放水路建設予定地内発掘調査報告書17，国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会。